

森からのお手紙

16号
2025

Topics

森のこよみ
お客様物語 尾崎裕子さん



お一人おひとりの人生が異なるように、お墓の選び方も実にさまざま。

その想いや考えを、お届けします。



今回のお客様 尾崎 裕子さん

第16回



「大切な人でした。こんなにも温かい人を冷たいコンクリートで囲まれたお墓に入れるのは嫌だつたんです。」

千葉県八千代市にお住まいの尾崎裕子さんは、ご主人の毅さんを亡くされたあと、4年ほどご遺骨をお手元に置かれていました。樹木葬を調べている中で、共感を持ったドイツの

公園墓地に近い、自然に還るというコンセプトの、森の墓苑に出会いました。

「直接話しを聞きに訪問したところ、お墓の説明よりも、鳥の巣箱の話やカエルの卵の話などが次々出てきて、楽しくなつてしまつて。一番の決め手は、個別墓うぐいすの場所に立つ

た時、房総の丘陵が一望できて、山からの風を感じたんですね。『もうここだな』と思いました」

1年程かけて、二人の娘さんや、毅さんのご兄弟を墓苑に案内し、説明して、みなさん賛成してくれました。最後に、森の墓苑に決めて彼はどう思うだろうと思い巡らしていた時、「すべて君に任せせるから」という、亡くなる前のご主人の言葉が浮かびました。その時は、それが、子どもたちや家族のことなんか、家のことなのか、そしてなぜそんな話をしているのか、はつきりさせることが怖くて、曖昧な返答しかできませんでしたが、「共感してくれている。彼がここに出会わせてくれたんだ」と、そう思えました。

音楽関係の仕事をされ、ご自身も趣味でチエロを弾かれていた毅さん。納骨の際は、ブライムスのドイツ・レクイエムを流しながら、参列者が土をかけていきました。最後は、ご友人には少し外してもらい、ご家族のみで、お骨が眠る土の上に手を重ねていき、「永遠の安息」を願いながらお別れしました。

1年後には、毅さんが保護犬の施設から譲り受け、17年半を共にした愛犬のそらちゃんがなくなり、納骨されました。写真を飾り、男性グループ嵐の『君の歌』を皆で歌い送りました。歌詞には、ペットが虹の橋を渡つて天国に行くこと、残された人が辛い別れを乗り越えていく心情が描かれています。

「プレートに刻む言葉や、植樹する木、お別れの仕方、そらちゃんの納骨など、家族でたくさん相談し考えました。普通の墓地では難しい、自分たちなりのこんな方法で、主人やそらちゃんの納骨を送ることができるなんて、本当に感謝と感動の気持ちで一杯です。

毅さんのプレートには、レクイエムの歌詞の中から「Lacrimosa, Requiem aeternam, Huic parce」(涙の日、永遠の安息を、この人を惜しみなさい)を意味する)を選び、そして、そらちゃんのプレートには「We are a family forever!」の言葉と肉球のマークが刻まれています。そこには房総の風を受け葉を揺らすエゴノキが佇んでいます。



◆見学やお墓参りについて ◆ご来苑の際は、スタッフ不在の場合がありますので、前日までにご連絡ください。

◆出張説明

◆ご自宅や団体・企業での説明会も承りますので、ご依頼ください。



今年の秋は、美しい秋錦の紅葉のもと、森と草はらづくりの「秋まつり」に多くの方にご参加をいただきました。生きもの調査研究の専門職員による自然観察のあとは、森づくりに役立っているミツバチのお話とみつろうのローソク作りを体験。地域食材のお弁当のあとは、竹の伐採や竹炭作りと地域に自生する苗木を植え付け、オミナエシなどの野草の種まきをおこないました。多くの方々と、房総の秋色を楽しみながら、苑内と周辺の自然や生きものたちがもっと元気になるように楽しいお話をして過ごしました。

研修では、そごう千葉店での環境ワークショップをはじめ、環境活動に取り組んでいる企業、大学生や専門学校の学生の方がたによる環境整備を行いました。生きものの調査や池の補修、生態系を下から支えるコウモリの巣箱づくりと設置をおこないました。コウモリは夕方から夜間に飛び、蚊やガなどが増えすぎないよう食べてくれる生態系のバランスをとっている「益獣」です。苑内にはさまざまな生きものの巣箱をたくさんかけており、シジュウカラなど多くの生きものが利用してくれています。生きものがゆたかに暮らせる環境づくりをこれからもすすめています。

体験の機会の場



年末年始 12月27日(土)～2026年1月4日(日)は毎日開苑

【開苑時間】10～16時 月曜定休（月曜日が祝祭日の場合は開苑）
【お問い合わせ】電話 0120-901-580（全日9時～18時）